

# が発告ナチス闘い

## 障害者庇護の名のもとに

# 「断種や安楽死 実施」

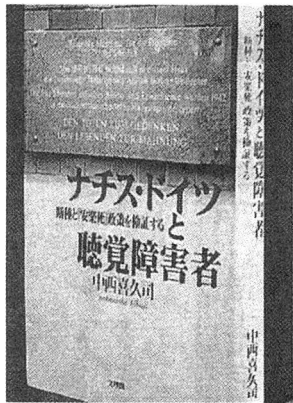
### 先月死去の府立聾学校元教師が研究書

京都府立聾学校(京都市右京区)の元教師が、がんと闘いながら研究書「ナチス・ドイツと聴覚障害者」をまとめ、死後、出版された。ドイツの史料をもとに、ナチスが障害者庇護の名目で行った断種と安楽死について詳しく紹介、障害者問題の根底にある差別意識に警鐘を鳴らしている。



故中西喜久司さん

出版したのは、奈良市の中西喜久司さんで自身も聴覚障害者だった。同志社大英文学科を卒業後、一九六二年から三十四年にわたり英語を教えた。三年前に胃がん



出版された「ナチス・ドイツと聴覚障害者」

がみつかり、手術を受けたが再発、今年九月十二日に六十六歳で亡くなった。

研究書は、長年、障害児教育と障害者運動に携わってきた中西さんからの最後のメッセージとなる内容で、八二年から八七年にかけて「日本聴覚障害新聞」に連載した記事を全面的に加筆修正した。

ワイマール共和国時代のドイツが高水準の社会保障を維持しながら、ナチス以降、障害者を安楽死や断種に追いやった論理を解き明かしている。また、新史料も発掘し、戦前日本でナチスの障害児教育が批判的に紹介された点にも触れている。

「夫が生前、いろんな差別問題について追求するうちに最後にたどり着い

たのが、ナチスの問題だったと思います。自分の世界をしっかりと持ち、信念を曲げなかった」と振り返る。

恭子さんによると、中西さんは亡くなる六日前「もっと生きたいと思うけれど、これで終わりです」と話し、パチパチと手をたたいた。自分や家

族、いろんな人に贈る拍手だった。障害がある教師として、障害者問題を問い続けた最後の言葉に思えたという。

文理閣刊、四六判、二百五十四ページ。定価二千二百円。十二日から主要書店に並ぶ。問い合わせは文理閣☎075(351)7553へ。